

## 三橋旅館が鎌倉長谷の発展に及ぼした影響に関する研究

### A Study on the Impact of Mitsuhashi-Ryokan on the Development of Hase, Kamakura

○押田佳子<sup>1</sup>\*Keiko Oshida<sup>1</sup>

Abstract: In this study, I investigated that impact of Mitsuhashi-Ryokan on the development of Hase, Kamakura. As a result, it was clarified that the Mitsuhashi-Ryokan promoted the introduction of infrastructure and the development of villas.

1. 背景および目的—鎌倉観光は、17世紀に大山参詣に鎌倉、江の島詣を組み込む形で観光経路が形成されたことにより飛躍的に発展した<sup>[1]</sup>。この経路のほぼ中央に位置する長谷においても、鎌倉幕府崩壊以降17世紀初頭までは小さな漁村の1つであったが<sup>[2][3]</sup>、時代の経過とともに賑わいのある人家等が記録されるようになり<sup>[4][5]</sup>、19世紀には、扇雀亭陶枝の『鎌倉日記』に「長谷なる三ツ橋といへるにて、(略)、爰は泊宿有所なり」<sup>[6]</sup>と「三ツ橋」の屋号を掲げた宿屋をはじめ、茶屋や宿の記載がみられるようになった。近代になると、E・ベルツと長与専斎がそれぞれ鎌倉を保養地・海水浴場の適地と評したことで、湘南地域の他都市に先駆け、多くの西洋文化が導入されるようになった<sup>[7]</sup>。この近代化の波は、由比ヶ浜から程近い長谷にも及び、上述の三ツ橋こと「三橋旅館」は、療養や保養で長谷を訪れた皇族や華族、政治家、文化人等が訪れる高級旅館として有名となっただけでなく、近代長谷の有力者として地域の発展に大きく貢献したことが伝えられる。三橋旅館は1923年の関東大震災により閉業し、当時の資料の多くも震災時に消失しているため、その全容は明らかにされて来なかったが、2019年に宿主の子孫より、かろうじて被災を免れた資料が提示されたことで、新たな局面を迎えようとしている。

そこで本研究では、三橋旅館が辿った歴史的経緯に着目し、三橋旅館が長谷の近代発展に及ぼした影響を明らかにすることを目的とする。

2. 調査方法—調査概要をTable1に示す。

3. 三橋旅館の概要—三橋旅館は江戸時代から1923年まで長谷観音前交差点前に存在した旅館である。1809年の扇雀亭陶枝以降<sup>[6]</sup>、閉業するまでの約110年間に、「三橋旅館本館(以降、三橋本館, Figure1)」を

Table1 Outline of the survey (調査概要) This is original table by author

調査方法	文献調査	ヒアリング調査
調査期間	2019年8月4日~2020年9月20日	2019年8月6日、9月14日
調査対象	『鎌倉市史近世通史編』『鎌倉市史近代通史編』ほか	三橋旅館宿主の子孫である、現当主M氏
調査内容	三橋旅館および三橋家に関する記録を抽出	三橋旅館の敷地、施設、および旅館時代にまつわる伝承について

はじめ、別館や出張所、別荘等、7施設以上を所有していたことを確認している。

4. 三橋旅館の盛衰より捉えた近代長谷の発展—文献調査より抽出された三橋旅館の履歴および長谷の動向に関する記録は全102件あり、その内容より、「旅館運営確立期」「海水浴場開設期」「旅館運営拡大期」「三橋旅館終焉期」の4期に分類された(Table2)。以降、各分類に従い、結果および考察を述べる。

(1) 旅館運営確立期(～1876年)—Table2より、旅館運営確立期の記録は8件みられ、『鎌倉日記』<sup>[6]</sup>や『江ノ島参詣之記書写』<sup>[7]</sup>より、19世紀には料理旅館の運営を確立していたことを確認した。

(2) 海水浴場開設期(1877～1890年)—Table2より、海水浴開設期の記録は24件みられ、1885年には、「此度由比ヶ浜海水浴ヲ設ケ」<sup>[10]</sup>より、由比ヶ浜にプ由比ヶ浜にプライベートビーチを設立し、「(体を洗う水を)担い桶で担いで運きた」<sup>[11]</sup>にみられる、観光客への先進的なサービスを施していたことを確認した。このことより、当時、療養や保養の要素が色濃かった海水浴をいち早く観光資源として捉えていたことが窺がえる。さらに、当時の宿泊者は、伊藤博文<sup>[9]</sup>や福沢諭吉<sup>[12]</sup>等、錚々たる面々であり、彼らの連絡手段確保のため、敷地内への郵便局設置や鎌倉で2番目の電話番号取得等<sup>[8][9]</sup>、近代インフラを積極的に導入したことを捉えた。

(3) 旅館運営拡大期(1891～1911年)—Table2より、旅館運営拡大期の記録は58件みられ、このうち三橋本館についての記録が44件と最多であるが、別館や



Figure1 Mitsuhashi-Ryokan main building(三橋本館の絵葉書)<sup>[21]</sup>

1: 日大理工・教員・まち

出張所なども時代を下るに従ってみられるようになり、旅館経営を拡大していったことが捉えられた<sup>[14][15]</sup>。

これは、海水浴場開設期において宿泊客が三橋本館の許容を越えており、規模の拡大を図るに至ったことに起因する。さらに、三越呉服店が由比ヶ浜で慰安會を開催した際には、三橋本館ならびに三橋第三別荘が活用されただけでなく、宿主三橋与八自ら取りまとめ役として地元の漁師や商店に声をかけ、慰安會を長谷全体でバックアップする体制を作り出し、その結果、地元の漁師や商店の売り上げに大きく貢献した<sup>[15]</sup>。一方で、1888年に初めて三橋旅館を訪れ、当地を気に入った前田俊嗣は1890年に当地に別荘を建築して以降、三橋旅館との交流は続したが<sup>[13]</sup>、同様の別荘族の増加が上級の宿泊客を逃す結果に繋がったと推察される。

(4) 三橋旅館終焉期(1912~1923年) —Table2より、三橋旅館終焉期の記録は12件みられ、うち3件は30年以上に亘り三橋旅館を核に近代長谷を発展させた三橋与八の逝去に関するものであった<sup>[17]</sup>。一方で、雪ノ下にあった三橋出張が1920年の『最新実測鎌倉江之嶋詳細図』には「山口旅館」と記され<sup>[20]</sup>、前期までの運営拡大から一転、縮小したことがわかる。また、引き続き著名人の利用は為されたものの、高級旅館故に庶民には手が出ないというイメージは固定され<sup>[18]</sup>、客層の拡大につながらなかったことも確認された。最終的には1923年の関東大震災により三橋旅館は倒壊、長谷一帯は甚大な被害を受け<sup>[19]</sup>、これにより長谷の近代化

を支えた別荘族も流出することとなった。

5. おわりに—以上より、近代長谷の発展の背景には、三橋旅館とそこに端を発する別荘文化とともにあったことが確認されたが、関東大震災に伴いこの双方が途絶えたため、当時の情報の多くは埋没している現状にある。今後は三橋家をはじめ、近隣に眠る近代の資源を発掘し、これら保全・活用することで、新たな観光まちづくりの展開が望めるであろう。

6. 謝辞—本稿の調査遂行にあたり、三橋旅館ご子孫の三橋文彦様より多大なるご協力を頂きました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。本研究は2019年度大林財団研究助成により実施しました。

7. 参考文献

[1] 押田佳子ら、「紀行文より捉えた近世鎌倉における観光経路および滞在拠点の成立過程に関する研究」、ランドスケープ研究74(5)、431-436、2011。  
 [2] 押田佳子、「徳川光圀『鎌倉日記』にみる近世鎌倉の観光および景観資源の発掘に関する研究」、ランドスケープ研究75(5)、373-376、2012。[3] 鎌倉市、「鎌倉市史近世通史編」、吉川弘文館、1989。[4] 押田佳子、「近代鎌倉における古都観光の継承状況に関する研究」、ランドスケープ研究76(5)、593-596、2013。[5] 鎌倉市、「鎌倉市史近代通史編」、吉川弘文館、1985。[6] 扇雀亭陶枝、「鎌倉日記」、1809。[7] 森七三郎、「江ノ島参詣之記書写」、1845。[8] 鎌倉市、「図説鎌倉年表」、1989。[9] 鎌倉市教育委員会、「としよりのはなし—鎌倉市文化財資料第7集」、1971。[10] 東京横浜毎日新聞広告欄：1885年3月25日、[11] 愛されて100年鎌倉海水浴場記念事業実行委員会、「鎌倉の海」、かまくら春秋社、1983。[12] 福沢諭吉、「福沢諭吉書簡集」、第5巻、2001。[13] 前田利嗣、「前田家鎌倉日記」、前田家所蔵、1900年頃。[14] 島津出版会、「しらゆき—島津忠重 伊楚子追想録(年譜)」、1978。[15] 三越呉服店編、「鎌倉と三越」、第一回慰安會、1922。[16] 三越呉服店編、「鎌倉と三越」、第二回慰安會、1922。[17] 69) 朝日新聞東京朝刊：1912年8月3日。[18] 石渡弘雄：「夢また夢の思い出—出草—百参歳の鎌倉つ子語る」、2014。[19] 鎌倉町、鎌倉震災誌、p.93、1930。[20] 松林堂、「最新実測鎌倉江之嶋詳細図」、1920。[21] 絵葉書「鎌倉 長谷旅館三橋ノ庭園」より転載(明治期に刊行)

Table2 Expert Records about history of Mihashi-Ryokan and development of Hase (三橋旅館の履歴と長谷の発展に関する記録の抜粋) (This is original table by author)

分類	記載数	西暦(年)	主な記載内容(下線は三橋旅館または三橋家、二重下線は長谷の発展に関連する項目を示す)
旅館運営 確立期	8件	1809	「長谷なる三ツ橋といへるにて、ひるのしたゝめする。生々しき鯨を火とらず爰は泊宿有所なり。」 <sup>[6]</sup>
		1845	(4月9日)「明日光明寺山系の順路の為、長谷村三ツ橋と言旅店」 <sup>[7]</sup>
海水浴場 開設期	24件	1879	(3月、三橋小左衛門)「明治八年頃長谷村に鎌倉でいちはやく置かれた「横浜郵便局出張及び取扱人」を引継ぎ、十二年三月自宅に「郵便取扱所」を開業」 <sup>[8]</sup> (御用聞きが盛んな長谷、坂ノ下地区、三橋旅館は町役場に次ぐ2番目)「電話が早くしかれるようになった。」 <sup>[9]</sup>
		1885	「海水浴御馳走広告(略) 此度由井ヶ浜海水浴ヲ設ケ御馳走仕度候間、何卒旧二倍シ御入湯旁陸続御來車ノ程伏而奉冀上候、(略) 相州鎌倉長谷 観音 大仏前 三橋與八」 <sup>[10]</sup>
		1885頃	(浜の小屋に水道を敷く話)「長谷の三橋旅館では、旅館の方にじいやさんがいて、担い桶で担いで運んできたんですよ。それだから対して身体をきれいにするほどは使えず顔を洗う程度でしたね」 <sup>[11]</sup>
		1887	「鎌倉警察の分遣所ができたのは(略)伊藤博文が三橋旅館に泊まっていたので、その警衛のためにつくったものだ」 <sup>[9]</sup> (9月5日~23日、福沢諭吉)「三橋旅館に子供たちと滞在」 <sup>[12]</sup>
		1887頃	「三橋旅館へよく伊藤博文が週末に来ていましたよ。新橋の半玉を数人歩いているのをよく見ました。」 <sup>[9]</sup>
旅館運営 拡大期	58件	1892	(7月31日、前田利嗣)「(前田別荘より) 宿主与八等へ白銀羽織地などの土産を持参し」 <sup>[13]</sup>
		1899	(夏、島津忠重)「長谷、三橋旅館別館で過ごす。」 <sup>[14]</sup> (11月6日、第一回慰安會について『三越と鎌倉』夕刊の表紙紛失の際に)「東京の留守師團から三橋本店へ電話で、ルーズベルト氏の奇禍を告げて来た、直ぐに號外として頒布する(略)」「会場より約一町を隔つた三橋旅館の別荘に『三越と鎌倉編輯局』の看板がかゝって居る」「辨當、?店の方などを受合つた三橋では、鬼殻焼や壺焼にする海老や榮螺は一週前から集めたといふことで(略)」 <sup>[15]</sup>
		1909	「鎌倉銀行が長谷の三橋旅館の倉庫のひさしのところに、長谷出張所をこしらえ」 <sup>[9]</sup> (11月3日、第二回慰安會について)「來賓の諸氏と女子部の二隊を會場附近の三橋旅館支店に伴ひ、今に晴るべき天候を待つ事とはなれり。」「先登隊の三橋支店前を通過せんとする際、突然天地もどろろく爆響渡り」 <sup>[16]</sup>
		1910	「父三橋與八儀 豫て病氣の處養生不相叶本日午後三時五十分死去致候(略) 三橋茂三郎」 <sup>[17]</sup>
三橋旅館 終焉期	12件	1912	(11月)「映画の総監督を務めた谷崎潤一郎と女優が長谷の三橋旅館に泊まるつもりでやってきましたが、この旅館の立派な門構えにびっくりして止まらないう話があったほど立派で美しい門構えでした。」 <sup>[18]</sup>
		1920	(9月1日)「火災は三橋旅館から発したのである。同旅館は建坪千坪に近い大建築であつたが、第一震と同時に倒潰し炊事場から発火した。火は火元が大きいだけに忽ち四方に燃え廣がり(略)」 <sup>[19]</sup>
		1923	